

歴史総合、日本史探究または世界史探究

【解答】

I	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
	b	b	c	d	a
	問 6	問 7	問 8		
b	d	b			
II	問 9	問 10	問 11	問 12	問 13
	d	b	a	d	c
	問 14	問 15	問 16		
	a	b	c		
III 選択	問 17	イギリスはオスマン帝国の混乱を狙い、フサイン-マクマホン書簡でパレスチナを含むアラブの独立を支持しつつ、自国のユダヤ人金融家から大戦費用を調達するため、バルフォア宣言でパレスチナでのユダヤ人国家建設を事実上認めた。			
	問 18	1930年アメリカは高関税政策をとり、税率を史上最高水準に引き上げた。これに対抗し、イギリスが連邦内の関税を下げた連邦外の国に対して高関税をかけるなどしたため、世界経済のブロック化をまねいた。			
IV 選択	問 17	蔦屋重三郎のように本屋を経営するものが現れ、洒落本、黄表紙、読本といった出版物だけでなく、錦絵として完成した浮世絵も民衆に受け入れられ黄金時代を迎えたが、寛政の改革では洒落本や黄表紙の取り締まりも行われた。			
	問 18	選挙直後に治安維持法違反の疑いで共産党関係者の検挙を行い、関係団体を解散させた。また、治安維持法を改正して最高刑を死刑・無期とし、全国の警察に特高を設置して翌年も大規模な検挙を行うなど、治安体制の強化を図った。			
V 選択	問 17	産業革命は、一連の技術革新と経営・労働形態の変革による生産力の増大であり、マンチェスターなどの新興工業都市で始まって、ほかの地域や産業にも波及した。その結果、資本主義と呼ばれる経済体制が確立した。			
	問 18	世界恐慌後の経済的混乱が世界大戦に繋がったことをふまえ、GATTを中心に貿易の自由化が進んだが、農産物の関税や流通・運輸・金融などのサービス部門、知的所有権関連通商の関税の引き下げは実現できなかった。			

## 【学習アドバイス】

本学の入試は、5科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分となっている。各科目にかける時間配分は1科目につき目安として50分前後である。

2026年度は2025年度の「地理歴史」から「歴史総合、日本史探究または世界史探究」へと科目名が変更されたが、日本史と世界史が融合した「歴史総合」に関する共通問題2題と、「歴史総合」・「日本史探究」・「世界史探究」それぞれに関する選択問題3題（解答する選択問題は1題）という大問の構成は昨年度と同様である。総解答数は共通問題16問、選択問題2問の計18問で、2025年度の23問から減少した。2025年度の選択問題は語句の知識を問う問題や正誤判定問題などが10問と、論述問題1問で構成されていたが、2026年度の入試では論述問題2問のみに変更されている。

共通問題が「歴史総合」から出題されるため、まずはこの対策をしっかりと行っていないと合格点をとることができない。世界史選択者にとっては近代以降の日本史分野の知識も必要で、日本が関わった事件や条約を学習する際に、当時の日本の首相、経済の状況、外交政策などの知識を補足しておく必要がある。一方、日本史選択者にとっては近代以降の世界史分野の知識が必要である。2026年度の入試では共通問題で出題された16問のうち15問が世界史分野に関する設問であるため、日本史分野を中心に学習してきた受験生にとっては手がつけられない問題であった。多様な地域の政治史を中心とする知識が問われており、そのほとんどが日本とは直接的な関連がない事項であった。したがって、日本史選択者は「歴史総合」の世界史分野の学習が必要不可欠である。細かな知識や地理的な理解を求める問題はないため、「歴史総合」の教科書を精読し、近代以降の世界史分野の基礎知識を着実に身につけておこう。「歴史総合」の対策に時間を要することもふまえ、計画的にバランスよく学習を進めることも大切である。

設問形式は、語句の知識を問う問題が4問、正誤判定問題が12問、論述問題が2問で構成されている。正誤判定問題の出題が圧倒的に多いため、過去問や大学入学共通テスト対策用の問題集を使用して重点的に対策しよう。演習を行う際は、選択肢の各文を丁寧に読み、人名・地名・政策といったキーワードに誤りがないか、時代や因果関係は適切かなどを確認し、知識をもとに正確に判断する実践的な力を養ってほしい。

得点に大きな差がつくと考えられるのが論述問題である。2026年度の入試では、各選択問題に100字程度で解答する論述問題が2問ずつ出題された（出題テーマは「イギリスのパレスチナ外交」「世界恐慌後の対応」「江戸時代中期における出版」「田中義一内閣の国内対応」「イギリス産業革命」「GATTの役割と限界」）。論述問題の出題数や字数は年度によって異なるが、歴史の流れの理解と文章で表現する力を受験生に求める出題方針に変わりはない。論述問題は一朝一夕での対応は難しいため、早めの着手が望ましい。最初は少なめの字数から始め、徐々に100字程度まで字数を増やしていこう。論述の際には「誰が」「いつ」「どこで」「何を」「どのような結果になったか」「どのような影響を与えたか」という形にならない述べるとうい。また、どの大問の論述問題も2つのキーワードを用いて説明するよう指示があるため、頻出テーマについてはキーワードを設定し、自分なりにまとめてみよう。キーワードをどのように結び付けて述べるべきかわからない時は、ぜひ教科書の記述を参考にしたい。教科書では端的な説明がされているため、キーワードとなっている用語の前後の記述を読み、教科書の言い回しを取り入れながら文章構成力を伸ばしていこう。そして、最も効果的な論述対策は添削指導である。必ず自分の解答を先生に添削してもらい、想定される加点要素のうち不足している記述はないか、文意の通らない表現はないかなど、改善すべき点を確認しよう。この繰り返しにより、論述問題に対する不安が自信へとかわり、合格へ大きく近づくことになるだろう。